

粕谷和夫観察日記。冬鳥のジョウビタキが帰ってきました。10月12日八王子西部（松竹公園西）でサシバ他タカの渡調査をしていると、すぐ近くに寄ってきました。遠い国からの到着です。（♡鳴き声もしぐさも可愛い鳥です）

# 紅葉台



# 新聞

第105号

2023年

11月25日

発行人：関谷 孝

## 始めよう！脱プラスチック生活～海鳥を守るために

山本 裕 さん（日本野鳥の会）  
山本さんは、日本野鳥の会のメンバーです。近年急激に個体数が減少している海鳥の保護とその生息環境を保全するために「海洋プラスチック問題の解決」に向け



「普及啓発」や「海鳥の影響調査」、「政策提言」を積極的に行っています。

海鳥は、全世界の鳥類約1万1千種のうち、359種（3.6%）ほどです。ペンギンやアホウドリ、カモメの間からウミツバメ、ウミスズメなどがいます。海鳥は、足指に水かきがあります。魚、イカ、甲殻類などの餌を海から得ています。海水を飲んでも塩分を越すことが出来る塩腺があり海洋での生活に適用することが出来ます。海鳥は、比較的長寿ですが1羽の雌が1回あたり産む卵は1～2個と少なく、シジュウカラなどと比べると少なく繁殖も遅いという特徴があります。そのため個体数の増減が餌となる魚の変化と関係があり、海洋汚染の指標ともなっています。

その海鳥が急速に数を減らしています。全体個体数の7割が減少したとされています。原因は、餌の減少。油や化学物質などの海洋汚染と言われています。繁殖地では、ネズミ類による捕食、人による卵の採取、マリンレジャーによる環境変化などがあげられますが、海洋プラスチック（海洋Pに略）ゴミが生存を脅かす新たな脅威となっています。



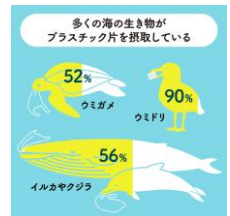
海鳥の摂食行動には2つあります。1つは海面に浮かぶプラスチックを餌であるクラゲと間違えて飲み込んでしまうという直接的な取り込みです。2つ目は、海中に漂うマイクロプラスチックをプランクトンが取り込み、それを小魚やイカ、甲殻類に食物連鎖し、それらを食べる海鳥の体内に入っていくという間接的な取り込みです。そのため、消化器の炎症や腸閉塞をおこして死んでしまいます。また、親鳥がヒナに餌として与え、栄養状態や成長不良を起こします。それは、プラスチックに含まれる有害物質が胃内で溶出し、腸などで再吸収され、脂肪などに蓄積し、影響を及ぼすからです。山本さんはオオミズナギドリ（尾腺ワックス）の尾腺ワックスから分泌される脂肪から海鳥の体内の添加剤の蓄積を知ることが出来ると言います。それだけでなく、魚や貝など自然の恵みを得ている私たち人間にも有害物質が移行、蓄積し、発がんや免疫の低下、生殖機能の低下を引き起こすと考えられています。



以前アメリカの小学校では、洗濯した衣

紅葉台新聞は、「高尾フモト同盟」のHPに公開されています。高尾の情報や働く人たちが紹介されています。興味を持った方は、覗いてみてください。また、皆様からの情報や投稿もお待ちしています。

類からもマイクロプラスチックが水の中に細かく溶けだしている実験をしているのを見たことがあります。私たちが気付かないところで海の中にマイクロプラスチックが流れていくのです。そのことを知ってから、我が家では、化学繊維を使わない服にし、洗濯も石鹸を使っています。石油で出来た製品はマイクロプラスチックを含んでいるからです。また、ラップ等をなるべく使わない生活をしています。蓋が付いている容器を使っています。なるべくプラスチックを使わないようにし、分別することで環境への放出を抑えることが出来ます。山本さんの話を聞いて、改めて海鳥を守ることは私たち人間も守ることにもなります。また生き物の生息環境を人間が作り出していることを再認識しました。事実を知ることは大事です。知ることでどうしたらいいかを考え実行することに繋がっていくからです。生きものが健康に生きられる環境になるためにも自分が少しでも出来ることをしていきたいですね。皆さんはどう思いましたでしょうか。（文責 関谷）



## 粕谷和夫の観察日記

八王子・高月水田で稲刈りの終わった田んぼに落穂を食



べに来たハシボソガラスです。「カラスが好きだ」という人は少ないと思いますが、この写真のカラスは「かわいい」と思いませんか。



秋になり、ネナシカズラは、自分では光合成せず、他の植物に巻き付いて根を入れ、養分を盗って生きている寄生植物です。サシバの渡調査地の北浅川土手にもネナシカズラが繁茂し、この花にオオチャバネセセリ（写真）、イチモンジセセリ、チャバネセセリと3種のセセリチョウ

が来て吸蜜していました。



我が家の鉢植えのタイワンホトトギス1株から6本が立ち、今夏の暑い夏に負けず無事に生き延びました。

10月になり、気が付くと6本のうち3本の葉が食べつくされました。そこにいたのは、ルリタテハの幼虫でした。来年の春にルリ色の帯が入った羽をもつ、とても美しいチョウに変身することを期待します。



高月の田んぼで、日本のタデの中で最も大きい花とされるサクラタデが稲穂に交じって咲いていました。

花が桜に似ています。休耕田には大変珍しいタコノアシが映えていました。実をつけた姿がタコノ足のようです。